

# 【特集】幼稚園、何を教えているの？

今月は幼稚園特集。

テーマはズバリ「幼稚園で教えていること」。

大人が想像もできないようなものすごい成長を見せる

この時期の子どもたちが、毎日をどのように過ごし、

そこで何を学ぶべきなのか？

様々な幼稚園に取材し、その教育方針や子ども観、

小学校・中学校へと続く“その先”に何を見ているのか

…をレポートしながら、幼稚園の今を伝えます！

## 幼稚園は“生きる力”を学ぶ場所…

峡南幼稚園副園長・徳田和子さん

編集部 幼稚園では何を教えているのでしょうか？ 漠然とした質問ですが。

徳田 大まかに言えば、生きる力を育てているってことだと思う。それは決して能力主義とかではなくて、他人と共に、なおかつ主体的に生きることだと思います。

編 いわゆる早期教育とは違う。

徳田 家では英語もやっている、文字や数のドリルもやっている。でも幼稚園に上がってきてもオムツもとれないし、ご飯も一人では食べられないというアンバランスさも見られます。知的教育だけを尺度にして子どもの成長を見てしまうと、この時期に大切な自立にむけての生活や心の育ちがゆがめられてしまうのではと危惧しています。

編 その一方、遊びだけでいいの？ という疑問もあります。「幼児は遊びの中で学ぶ」とよく言われますが…

徳田 私は、子どもたちがみな“今”やりたいという衝動を何かしら持っていると感じています。彼らは人間として育つために必要なことを自然な感

性でわかっているんだと思うんですけど、それを大人や教師が育ててやらないといけません。遊び=放任ではなくて、押しつけることでもない。子どもたちが今やりたいという願いにしっかり応えて、よく導いてあげる。その結果、何かができた時の彼らの喜びというのは非常に深いものでして、それが自信になり、人格的な成長になるんです。

### 成長したい！という子どもの願い

編 3～6歳は肉体的にも感覚的にも発達する時期ですよ。この時期の“子ども像”をどう捉えていますか？

徳田 一口に3歳といっても一人ひとりとは全然違います。誕生月によっても違うし、育った環境によっても違う。子どもにはそれぞれ“今、これをした”ということがあって、ボタンをはめたい、小石を捨てて穴に落としたい、歩道の一段高くなっているところを歩きたい。大人はそれをただのいたずらと見がちですけど、それは「指先を自由に使えるようになりたい」「体



を使ってバランス感を覚えたい」という、子どもたちの願いなんです。モンテッソーリ教育では、この特別な感性の時期を「敏感期」と呼んでいます。編 成長のためにそれを本能的に求めている？

徳田 ある時期の子どもは秩序にすごく敏感です。空間や時間の秩序を変えると落ち着かなくなる。例えば教室のゴミ箱の位置を動かしただけでクラスがザワザワします。いつも安定した自分の空間、自分の時間の中で、安心して自分のやりたいことをして成長したいと願っているのです。

編 家庭でも、子どもがドアが閉まっていると怒ったりとか、そんな場面

がありますね。それは“わがまま”とか“こだわり”じゃないんですね。

徳田 そういう子どもの特性をわかっていないと、「子どもって宇宙人みたい」と親が悩んだり、子どもを褒に叱ったりする訳です。

編 他にこの時期の子どもの特性ってありますか？

徳田 切るとか貼るといった手を使うことをしたがる。水や砂や泥に触りたい。それからある程度字を覚えたいとか、知っている動物を分類したいとか、文化的なことにも興味を持ちます。

編 峡南幼稚園では“やりたい”時に適切な教具（モンテッソーリ教育で使われる教材）を示すのを大事にしていますね。教具には、手先の器用さを促したり、作業を通して文字や数への興味を深めていくものが見られます。

徳田 ただし幼稚園に入ったから急に切り紙をやりなさい、縫い取りをやりなさいということではありません。それをやりたい時、できる時が一人ひとり違うから、それを待つ。そしてその時を見逃さず、それに適した教材や遊びを提供してあげるのがとても重要。

### 健康・人間関係が足りない？

編 ところで“生きる力”をつけるためには具体的にどんな実践が必要だと思いますか？ 幼稚園教育要領（文科省が示す幼児教育の指針）には「健康」「人間関係」「言葉」「環境」「表現」の

5つの領域が示されていますが。

徳田 平成20年の教育要領には「健康」と「人間関係」に重点が置かれていたように思います。それは子どもたちの体力が落ちてきているということや、大人数での遊びが難しくなっているという時代を反映してのことなのでしょう。「健康」については、体操教室のようなものよりも、鬼ごっこやドッジボールのような、子どもの興味に基づいたものの方がよいと考えます。子どもの意欲に応える活動と、それを育ててあげる教師の関わり方が大事。

編 峡南幼稚園では障害児も受け入れています。人間関係」という点で子どもたちが学ぶことも多いのでは？

徳田 言い尽くせないくらいいっぱいあります。例えばクリスマスの聖誕劇の時、言葉がしゃべれないAちゃんという子が、歌だけを歌う宿屋の役をすることになったんです。その子の面倒を見ていたBちゃんは主役のマリアをやる予定だったんですが、ある時、Aちゃんと一緒に宿屋をやりたいと言いました。自分が一緒にやればAちゃんが喜んでくれるからと。それからというもの「今日はAちゃんがこういうふうによったよ！」「ここまでできるようになったよ」と、自分のことのように喜んで先生に報告するようになったんです。本番でも二人でその役をやりこなしました。その時の表情といたら！何とも言えないような満

ち足りたもので、とっても印象に残っています。そんな中で、障害のある子ども、周りの子どもも成長します。そしてその成長のプロセスを見守る教師もね。

### 自分の人生を主体的に

編 先生の関わりも大事ですね。

徳田 幼児教育の鍵は教師にあります。大人を小さくしたのが子どもではなくて、子どもも一個の人間だってことを尊重できる人でなければ教師としてはダメ。子どもが個々に違った成長をしていいと思う気持ちと、あの子さみしがっているかな？今これをしたいの思っているかな？と、それを感じる柔らかな心を持っているかどうかポイントですね。そこで適切な援助ができれば、子どもは自分をわかってくれる大人がいることに安心しつつ自分を発揮し、やがて自立し、そして生きる力を獲得するんです。

編 幼稚園から育った子が将来、どんな人間になってほしいと思いますか？

徳田 移り変わりの激しい社会の中で、誰かに動かされて漠然と生きるのではなくて、自分で考えていてほしい。やりたいことを自分で選ぶ自主性とそれを成し遂げた時の自信、他人を思いやるやさしさと他人から必要とされることを喜ぶ気持ちを持ちながら、自分の人生を主体的に生きていてほしい。それが生きる力ってことだと思うから。

## 峡南幼稚園

3学年の縦割りによるモンテッソーリ教育が最大の特徴。午前中の“お仕事”の時間には、子どもたちは思い思いの教具にむかうので、一つの教室内で様々な作業が同時進行することになります。一見、ただの工作のようにも見えるのですが、実は手先の器用さや数・文字への興味を促すために考えられたもの。そしてそれに自発的に取り組み、達成することが、子どもの自信や感性を育てることになる、というのが園としての考え方です。先生は、個々の興味や挑戦したい心、あるいはつまずきに目を配っています。見守る、新しい課題に誘う、時には手伝う…絶妙な距離感で子どもたちに接し、その成長を助けているのです。



【峡南幼稚園】  
増穂町青柳町 160  
TEL0556-22-0604  
※見学随時可能  
(事前に連絡してください)

